



# ひがし風



## 「実りの秋～読書のすゝめ～」

校長 伊藤 誠

東北や北海道の山々から初冠雪の便りが届くようになり、秋の深まりを感じる季節となりました。学校では、11月8日（土）に行われる校内音楽会に向けて、きれいな歌声や楽器の音色が校舎内外に響きわたり、文化の薫り、「芸術の秋」を感じる時期となります。

10月16日（木）には鴻巣市小学校陸上競技大会が開催され、6年生が参加しました。小雨交じりの天候でしたが、多くの保護者の方にも参観していただきました。入賞や自己ベストを出すことができた、また、惜しくもそうでなかった子どもたちもいましたが、精一杯走ったり投げたり跳んだり、友だちを一生懸命応援したりと、けやきっ子の代表として本当に立派な態度で臨んでいました。1か月余り、残暑厳しい中での練習もありましたが、各自が目標をもって練習に取り組んだ成果を存分に発揮し、一人一人が輝いた1日でした。

さて、昼と夜の時間がほぼ同じ長さだった秋分の日を境に、この1か月で日が暮れるのが随分と早くなってきました。農業や林業といった戸外での仕事を中心だった頃は、日暮れとともに仕事が終了し夜が長く感じられたことから、「秋の夜長」という言葉が生まれたそうです。

「秋の夜長」という言葉から連想されるのは、「家族」や「一家の団らん」です。この時期、みんなで読書をしたり音楽を聴いたりする等の時間を過ごしてはいかがでしょうか。10月27日（月）から11月9日（日）までは秋の「読書週間」です。2025年の読書週間標語「ころとあたまの、深呼吸」をつくった磯辺菜々さんは、その思いを「めまぐるしい日常に息が詰まるとき、私は本を開きます。心が震え、ため息をつく。ハッと気がつき、息をのむ。ひと息ついて、まためくる。そうしてころとあたまに酸素が満ちたら、どこまでも遠くへ泳いでいける気がします」と述べています。また、ブックディレクターの幅允孝さんは、「本は二度と同じように読めないので、その一期一会を楽しんでもらいたい。」と語っています。

読書週間の始まりである27日（月）には、1年生へのセカンドブック贈呈式を行いました。鴻巣市では、平成26年から小学校1年生に20冊の本のリストの中から1冊を選んでもらい、秋の読書週間にプレゼントする、セカンドブック事業を実施しています。この事業は、本をプレゼントすることで子どもたち自身が読書の楽しさを知るきっかけをつくり、自発的な読書活動につなげることを目的としています。1年生にとって、そしてご家族にとって「秋の夜長」が「この一冊に、ありがとう」と思えるような本との出会いになることを願っております。

以下にセカンドブックを手にした1年生の感想を一部紹介いたします。

- ・本をもらってとってもうれしかったです。大事に読みます。宝物にします。
- ・早くお家に帰って本を読みたいです。本を読むのが楽しみです。
- ・本をもらって、おもしろそうでした。これからも大切にしようと思います。
- ・わたしは「こうのとりのこうちゃん」という本をもらいました。早く読みたいです。
- ・気になって読みたくなる気持ちです。本を読むのが楽しみです。
- ・家族といっしょに読みたいです。

